

蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

13

明治大学博物館 外山 徹

お八百懐妊

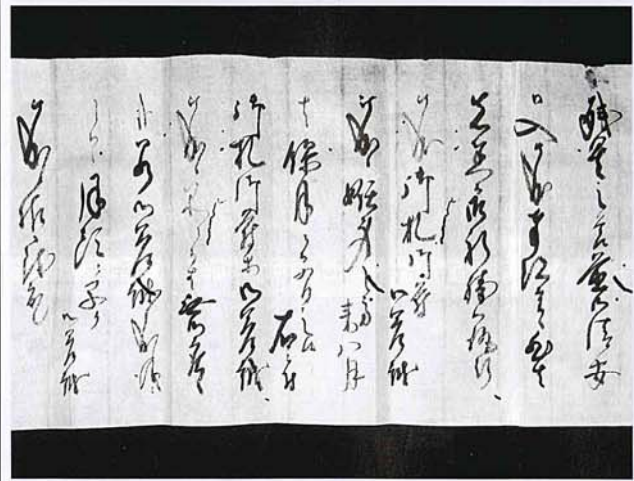
明和九年（七七二）の二月から五月にかけて、紀伊徳川家を施主に葉王院門末あげての八千枚護摩供十座が執行された。これ以降、八代藩主重倫代における継続的な祈禱執行の記録が残りはじめ

重倫の悲運
この大規模な祈禱執行の具体的な理由は明らかではないが、当主重倫の病気がその一つであろう。前年夏より瘧疾に悩まされていた重倫であるが、九月の葉王院隠居湛玄に宛てられた書状には気になる文言があった。それは、病気の理由を尋ねるにあたって、それが「因縁」によるものかと問うている点である。死に至る病を疑

う中での因縁という表現は穏やかではない。

実は、重倫は自らの体調ばかりではなく、その年の年明けから相次いで子を亡くしていた。一月には一歳に満たない四女の歿姫を、二月には満三歳の次女錯姫を抱瘡で、六月には長男弥之助を亡くしている。特に弥之助は愛妾お八百の方との間に出来た待望の男子だっただけに、重倫の落胆たるや想像に難くない。弥之助の死は生まれてからまだ四か月足らず、重倫が参勤で留守の間のことであった。相次ぐ子らの死に自らの不調。因縁を疑うのも無理はないかもしれぬ。すなわち、重倫の不調は心身ともにであった可能性がある。不

幸はさらに続き、翌年二月から始まった八千枚護摩供の最中の三月にも五女の銚姫を七か月で亡くしていた。実に一年余りの間に三女一男を亡くす不幸に遭っていたのである。



お八百の方の臨月と御札・護符の督促を伝える
紀州家家臣浅井庄左衛門の書状

内、年次の判明するものとしては明和九年三月二日付の銚姫死去の報が最初である。この時は、隠居湛玄に宛て、このことについてとりあえず知らせておくこと、山主秀興に伝えるべきかどうかについては判断を任ずること、祈禱執行の継続は差し支えなく家臣の代参も継続することが述べられて

ている。

お八百懐妊

紀州家からの書状は、残念ながら年次のはっきりしないものも多いのだが、次に到来したのが写真の七月二十四日付、やはり浅井庄左衛門からの書状である。五月の護摩供結願の次の動きを示す史料ということになる。

まずは、写真にある前半部分について解説文を掲載しよう。

- 残暑之節 益御清安
- 御入被成奉珍重候然者
- 先達而御祈禱御執行
- 被成御札御符
- 御差越
- 被成候妊身之方
- 来八月
- 者臨月二而有之候
- 右二付
- 御札御符等御差越
- 被成候品三而者無御座候
- 哉若御差越被成候儀二
- 候八、月頭二早々
- 御差越
- 被成候様被致度候
- (後略)

続いて文章の意味を取ってみる。

残暑の節、益々ご清安に入らる珍重に存じます。さて、先日ご祈禱を執行になられ御札・護符をお送りいたたくはすの妊婦の方が来る八月に臨月となりませう。御札・護符などお送りいたたくはすのでしうかもしお送りいただけようでしたら月の頭に早々にお送りください。

旧暦の月遅れを考えるとだいたい現在の九月という頃だろう。この続きの後半部分には隠居湛玄に対し、重倫全快の祈禱を依頼していたが六月も七月も御札が届いていない。もしかしたら取り紛れてしまったのかもしれないが、お送りいただくことができるか、と記されている。

どうやら、八千枚護摩供が五月に結願となった後、次の月から引き続き

懐妊したお八百の方に対する安産祈禱を山主秀興に、また、重倫の病氣快復を湛玄に依頼したようだ。それが、六月分七月分と、何らかの理由で御札・護符が浅井の手許に届いていなかった、あるいは届けられる過程で取り紛れてしまったという状況を読み取ることもできる。

後々、安産の祈禱について臨月から遡って五ヶ月近く前の段階で依頼が来ている事例があるので、この時も三月にはお八百の懐妊が判明していた可能性はある。銚姫の死はあったものの、最愛のお八百の方の懐妊とあれば、八千枚護摩供の利益として重倫には感ずるものがあっただろう。それ程にお八百の方を寵愛していたことに関しては、一つの逸話が伝えられている。

おふさ手討ちの逸話

『南紀徳川史』は重倫の評伝として、いくつか

その常軌を逸した行動を記している。

重倫が葉王院隠居湛玄宛に書状を送った明和八年のこと。この年、六月には次男岩千代（後の十代藩主治宝）が誕生しているが、それにまつわる話である。寵愛するお八百の方の嫉妬が原因で重倫が岩千代の生母おふさの方（澄清院）を手討ちにし、岩千代は女中が床下に匿い危うく難を逃れたというものである。この話には、お八百の子である前出の弥之助の死去に対し、おふさに岩千代が生まれたことを理由とする説と、お八百とおふさの出産が同日となったが、お八百は女子を、おふさは男子を出生したからという二説がある。

『南紀徳川史』の系譜では弥之助の命日と岩千代の出生日は同じ六月十八日となっているが、弥之助は和歌山で死んでいるので、その報せが届くにはある程度日数がか

かっただろう。また、おふさと同日にお八百が出産した記録はない。おふさは確かに同年十一月に没しているが、岩千代の誕生からは半年余り先のことであり、この話は虚構と考えられている。

それでも何故にこのような刃傷沙汰の評伝が存在するのかには、考の余地がある。それには、重倫の曾祖父にあたる伊予西条藩主松平頼純による嗣子頼雄の廃嫡事件の影響が考えられる。頼純にはこれに関わり諫言する重臣を斬つたという伝がある。頼雄は幽閉の後、断食により自死に至るといふ非業の最期を遂げており、そのことは兄に代わって西条藩主、さらには和歌山藩主を継いだ宗直とその子孫・家中において重く受け止められていたようだ。実際に重倫を頼雄の生まれ変わりとして恐れる表現もある。後には西条藩主として復権もなされ廟所も整備されている。重倫が因縁

と悩む中にはこの家系の問題も含まれていたのかもしれない。

そして、やはり重倫によるお八百の方に対する寵愛という点では、これは曾祖父譲りなのかもしれない。実際、長女懿姫をはじめお八百との間に最も多くの子をもうけている。想像をたくましくすれば、明和八年二月の参勤出立の延期は弥之助の出生を待っていたのかもしれない（『南紀徳川史』では参勤の出立日と弥之助の出生日が同日）。翌年三月の帰国延期もお八百の懐妊が理由かもしれない。ここまで書くと歴史研究というよりは時代小説なみになってしまうが、後々お八百母子についての祈禱依頼が延々と続くことから、愛する女性とその子らに対する煩惱がよく感じられるのである。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。